The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評会報告>三木英著『宗教と震災ー阪神・淡路、東日本のそれから』書評に応えて
Author(s)	三木, 英
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(1), p. 91-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評に応えて

三木　英*

先ず、拙著の書評会を催して下さった「宗教と社会貢献」研究会に対し、御礼申し上げる。被災後の人と社会に宗教は何ができるのか。この問いを強く意識しながら、筆者なりの視点から、フィールド・ワークの成果を基に論じたものが拙著である。研究会設立の趣旨に適うとして、取り上げて下さったのだろう。

そして実際に書評の労を執って下さった金子昭氏、齋藤知明氏に心より御礼申し上げたい。筆者は宗教社会学を専攻する者である。もっといえば、社会学という学問領域にこだわって宗教研究を続けている。社会学者だからこそ見えるもの、言えることを表現することが、筆者の研究者としての存在理由だと思う。社会学を専門とされないお二人には、そのこだわりの表れである拙著が「宗教と震災」をめぐる諸事象の一面だけに照射する仕事と映じたかもしれない。だからこそ余計に、拙著を読み込んで評して下さったお二人に深謝したいのである

以降、頂戴した書評にリプライしてゆく。金子氏への応答から始めるが、氏による文中に拙著への特段の異論は見出せなかった。筆者としては胸をなでおろすばかりである。むしろ、拙著中の表現力未熟な部分を補うようにまとめて下さっており――たとえば「ポストフェストゥム」的気分という表現など――あらためて感謝するところである。

そう理解した上でのことゆえに、枝葉末節的なリプライとなるが、お許しいただきたい。金子氏は、筆者に「組織的活動を教団全体の組織のレベルで考えている節がある」、と捉えている。しかし組織イコール教団と考えるばかりでは、いまも東北の被災地で宗教者有志が支援組織を結成している現実に目が届きにくくなるというのであろう。

確かに筆者の念頭にある組織とは、第一に、教団のそれである。それは、未曾有の困難に直面する人々に対して、いまこそ教団が組織を挙げて取り組む必要があると思うからにほかならない。さらにこの思いの背景に、現代日本で深刻な「教団離れ」が進行しているとする判断がある。筆者は拙

*大阪国際大学・教授・mikia0101@nifty.com

著が多くの人に読まれることを望む。なかでも、教団中枢に在る方々が目を通して下さることを願っている。彼らの意思は教団組織の動きに直結していよう。拙著が彼らに影響を及ぼしうるなら、教団に生じる動きは被災地の人々や被災地で活動する有志組織に益をもたらすだろう。それが延いては、教団離れを食い止めることにもなりうる。拙著は教団組織の持つ資源に可能性を見出しているのである。

また金子氏は、時を経るにつれ被災地において救済宗教から民俗宗教への変容が進行すると述べる。それに首肯はできるものの、筆者として若干の違和感を覚えたので、補足しておきたい。氏の言に則るなら、救済宗教と民俗宗教は同一時点で並び立たないことになるのではないか。しかし筆者は被災地で、救済宗教による活動とは別に、被災者自らが宗教的な儀礼――これを金子氏は民俗宗教と捉えている――を再発見・創出して自らを癒していたことを見出した。その主体は救済宗教による癒しでは満足できない自称無宗教者で、彼らの数は間違いなく多い。筆者が追おうとしているのは、「救済から民俗へ」の宗教の変容ではなく、救済宗教と一線を画す無宗教者というマジョリティに、救済宗教がどう寄り添えるかなのである。また「民俗宗教」という概念を使用することに異議がある。民俗宗教は、救済宗教からの影響を受けた民衆が、自らを主体として営むものと筆者は理解している。ところが拙著中の自称無宗教者たちが実践していた儀礼――巡礼、祭り、さらには灯りに儀礼――には、救済宗教からの直接的影響は乏しいのである。

そして枝葉末節の極みであるが、以下も記させていただく。金子氏は筆者が『生駒の神々』（1985）に関わったと記して下さっている。しかし 1985 年以前、筆者はフィールド・ワーク未経験の学部生・修士課程院生に過ぎず、この仕事に全く関われていない。氏は誤解されており、それを筆者は嬉しく光栄に思うのだが、事実は正しておかねばなるまい。

次に齋藤氏にリプライするが、最初に、書評中に頻出する「宗教文化（の新たに生まれた、等）」という表現に対しコメントしておきたい。宗教「文化」とは宗教的な意味体系のことであろう。人間が霊魂を有することを想定し、肉体を離れた魂に祈り追悼する者同士がつながり合うことを当然視する観念は、そこに含まれている。被災者はこの観念をシェアして慰霊の巡礼や灯りの儀礼に携わるが、この宗教文化は昔から存在するものであっ

て、新たに興ったものでないことはいうまでもない。（齋藤氏のいわれるように新たに）興ったのは、既存の宗教文化の上に案出された民衆的儀礼である。この儀礼と宗教文化とが同一視されているために拙著の主張が正しく伝わらなくなることを懸念し、ここに記しておく。

続いて三つの質問に応えてゆこう。「理念と現実」「宗教者と市民」「教団と宗教者」の、それぞれの「対立軸」に関わる質問である。対立軸は、齋藤氏が拙著の議論展開のなかにそれを見て取ったということだろうが、筆者にそれは曲解であると感じられる。

（筆者が）宗教を理念として捉えるがあまり現実を見る際に大きなギャップが生じていないか、とは評者による言葉である。これは、「宗教とはこうあるべき」との筆者の思いが強すぎて、この枠組みにあてはまるものだけを拾い上げているのでないか、という批判であろう。腑に落ちないのだが、そもそも宗教社会学研究にあたり、対象（宗教）がいかなるものかを理念的に認識した上でそれを行なうことは当然のことであるが、対象がどうあるべきか、を研究の起点には据えない。筆者は E.デュルケムに多くを負い、議論を拙著において展開してきたが、デュルケム的な立場を唯一絶対の研究スタンスとは毛頭考えていない。評者の指摘するように拙著中に言及する宗教性は「聖性」の濃淡を尺度としているが、この尺度も、宗教性を測るための数ある尺度の内の一つである。評者は文中に、筆者が「被災地・被災者に接する理想の『宗教』とは何か、を一貫して読者に問うている」と記すが、筆者自身に「理想」追求をしているつもりはない。

第一の質問である「理念と現実の対立軸」に関係するものとして、齋藤氏は、祭りや巡礼といった民衆的儀礼に震災当初から本当に宗教性があったのか、それら儀礼から本当に慰霊・追悼の側面が希薄化していったのか、どうしてそれら儀礼がイベント化してゆくのか、といった疑問点を挙げておられた。それへの答えは拙著中に示唆していると筆者は思うが、上のように問われるのは、祭りや巡礼を筆者が理念として捉え過ぎていると、氏が見るからだろうか。とはいえ、もちろん、祭りや巡礼のあるべき姿について筆者は布告しようとするものではない。

齋藤氏は拙著中に見た「宗教者と市民との対立軸」に関しても疑問を投げかけている。氏には筆者が両者を対照的なものと見、交わらないものと最初から決めつけているよう、感じられたのだろう。氏は東北の被災地で、

市民と積極的に関わる宗教者たちに接している。両者の協同が実際にあるにもかかわらず、拙著ではそれは取り上げられていない。そこに氏は筆者の先入見を看取し、疑問を呈しているのだと思われる。もちろん筆者はそれに対し、否、と応答するばかりである。阪神・淡路大震災被災地では、市民（宗教者以外の被災者）たちが実践する民衆的儀礼に宗教者が積極的に関与するケースは殆どなかった。だからこそ、それを拙著中に描くことはできなかったのである。

こう記せば、再び齋藤氏から本当にそうだったのか、「十分な検証」を行ったのかと問われることであろう。そして筆者はこう答えよう。そうである、民衆的儀礼の現場に何度も参与観察して得た結論である、と。この結論を導く根拠は無論、完璧とはいえない。しかし、不足しているだろうか。氏は東北の被災地で宗教者が市民に関わっているというが、そう認識した根拠と筆者の根拠とは同じレベルにある。氏の見た現実は広い被災地における例外的なものかもしれず、宗教者の積極性に困惑している市民もいるかもしれない。十分な検証は難しい。

最後の問いは「教団と宗教者の対立軸」に関わる。これについても筆者は、両者が対立している図式を念頭に置いてはいないと答えよう。対立ではなくむしろ、活動する個々の宗教者と彼らを支えうる教団、という補完的なイメージである。齋藤氏は、現地での支援には個々の宗教者の協同こそ現実的だと主張する。それに同意するものの、それでは一体、宗教者たちの本部（教団）や宗教界はどうするのか。「（巨大な存在を軸とした継続的な支援活動の）実現可能性を考えると現実的ではないのではかなろうか」との氏の言葉に、教団に期待することの困難を痛感する氏の心意が読み取れるように思える。もしそうであれば、氏こそが教団と宗教者の対立軸に囚われている。

金子氏へのリプライ中にも記したことであるが、筆者は教団中枢に拙著の読者になっていただきたく思っている。拙論が彼らを刺激することに成功し、組織が立ち上がれば、重厚な支援活動が実施されてゆくであろう。同時に教団には、現場で活動する宗教者たちを励まし、支えることが期待される。とはいえ現実にそれは、齋藤氏のいう通り、難しいことに違いない。だが、その難しいことを実現すれば、宗教（教団）離れの時代に変化が生じうる。逆にいえば、できそうもないことを実行しなければ、変化は

生じず、教団にとってネガティブな状況が進行するばかりではないか。リプライ文を紡ぐなか、拙著が教団に向けてのアピールの書という側面を濃厚に持つことを、あらためて認識した。その意味では、齋藤氏の気づかれた通り、規範的に過ぎるところが拙著にはあるかもしれない。社会学にこだわる筆者としては、筆の滑りを自覚すべきところである。とはいえ同時に、アクション・リサーチの仕事を初めて行いえた、という一種の達成感も筆者は持つ。

拙文を終えるにあたり、東日本大震災からまだ僅かに五年しか経ていないことを強調しておきたい。これから、十年後も、二十年後も、東北地方太平洋岸は被災地であり続ける。2016 年に二十一年のあの日を終えた阪神・淡路地域も、犠牲者を悼む人々の気持ちに希薄化の見られない、PTSD に悩む人々が消え果てていない、震災によって破壊された生活の再建に苦闘する人々の残る、被災地である。その阪神・淡路の被災地で拙著中に取り上げた「1.17 のつどい」が催されたのは、大地の揺れたあの日から四年目のことであった。また四年目、五年目、さらにそれ以降も、被災各地に震災モニュメントの建立は続いた（そしてモニュメントを訪ね歩く巡礼が恒例化された）。これを先例とするなら、被災者が立ち直りへのポジティブな動きを見せてくるのは、まだこれからのことである。

東日本大震災被災地における宗教の研究は、これからも考究すべきテーマである。これに従う研究者――筆者もそこに連なることを望むものであるが――が、拙著を一つの導きとしていただけるなら幸いである。